

まず海を渡る、全てをそこから始める！

ハイブリッド留学を始動させた工学院大学のグローバル戦略

Cross the Sea First, Everything Starts from There:

The Global Strategy of KOGAKUIN Univ. which Started the

“Hybrid Study Abroad” Program

工学院大学グローバル戦略部長 青木 俊志

AOKI Shunji

(Senior Director, Global Strategy Office, Kogakuin University)

キーワード：日本初・独自の取組、まず海を渡る、英語力不問の留学、留学支援

ハイブリッド留学プログラムの特徴 ～日本初、そして独自の取組！～

工学院大学ハイブリッド留学の最大の特徴は、学期中の一定期間（イギリス4カ月間、アメリカ2.5カ月間）の大学授業を、丸ごと英国もしくは米国で実施し、留学中の本学授業科目は、渡航する本学教員が日本語で実施、現地滞在中はホームステイにより英語で生活する、というハイブリッド環境による留学という点である。まずグローバルな感性、感覚を養成することを最優先し、語学は後からついてくる、という考え方に基づいている。「海を渡り海外で暮らす＞語学の習得」という考え方だ。

これまでの留学プログラムとの違い

従来大学における留学プログラムは、留学中の単位不足による留年を防止するため、その必要最低限の科目を、現地協定大学等に所属し、協定大学等の開講する専門科目を現地言語にて履修し、帰国後その単位を認定するという方法が一般的であった。そのため留学に際しては、まず協定大学への入学必須条件として英語力判定テスト（TOEFL や IELTS など）での一定以上の基準点獲得が必要となり、さらに協定大学での授業料も徴収されるため、参加するハードルが高く、留学を身近なものとして捉えることはできていなかった。

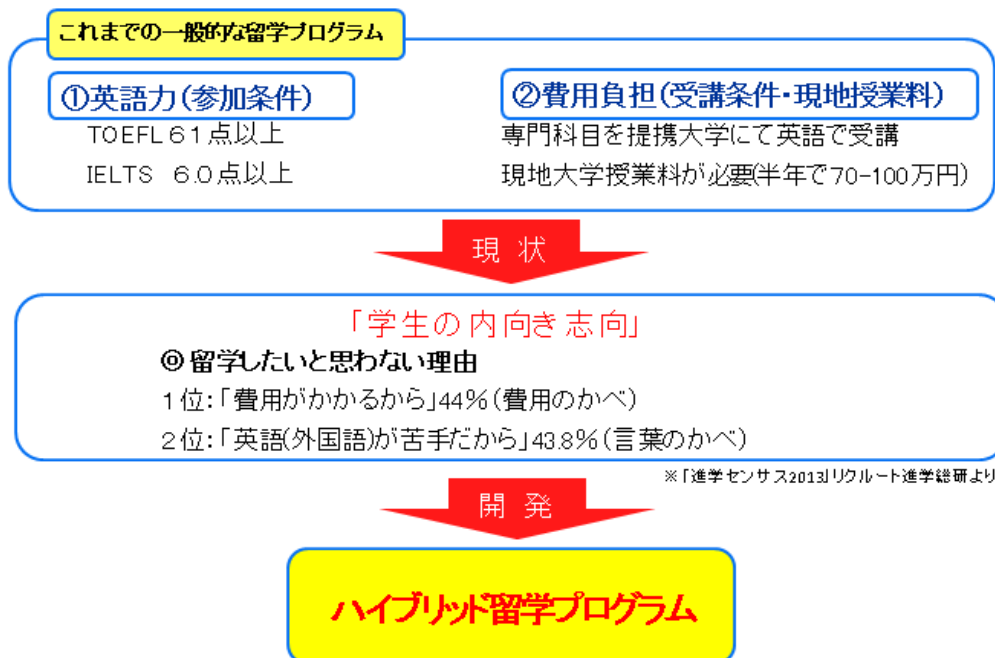
本プログラムは、この問題を一気に解決するため、逆転の発想からスタートし開発した。まず留学

中の単位不足による留年等を防止するための必要最低限の科目は、本学担当教員が渡航し現地で実施することにより専門科目履修の際の「言葉の壁」を取り払った。これによりこれまで発生していた留学先の協定大学への授業料支払いも、本学が直接教員を現地に派遣し、現地にて授業を実施するため、必要ない。

このハイブリッド留学は英語力が一定の水準に達してから留学させるのではなく、まず海を渡り、エンジニア、サイエンティスト、アーキテクトとして必要な海外での経験値を上げながら、英語やグローバルな思考、解決力（行動力）が自然と身につくようにプログラムされている。

プログラム開発の背景

なぜ留学する学生が増えないのか？ ⇒ 2つの壁が存在



「ハイブリッド留学」のコンセプト

～2つの壁を取り払う～

言葉のかべ(英語力不問)

- ◎現地にて開講する本学専門科目は、その担当教員が日本から渡航し、現地で日本語にて授業する。
 授業は短期集中講座で実施。
 1科目1週間(1日3コマ×5日間=15コマ)程度での実施を繰り返す。

費用のかべ(現地授業料不要)

- ◎本学教員を直接現地へ派遣し、現地にて授業を開講するため、現地での授業料は不要。
 ◎本人負担はホームステイ費用および渡航費用のみ

対象学部とプログラム期間

●イギリス・ハイブリッド留学

(カンタベリー市)

建築学部：3年次後期、4カ月間



●アメリカ・ハイブリッド留学

(シアトル市他)

工学部：1年次前期、2.5カ月間

情報学部・先進工学部：2年次前期第2
クォーター、2.5カ月間

英語力強化は必須！

英語力強化はもちろん必須課題である。現地における英語授業は本学と現地提携校が連携し、留学期間を最大に有効活用した内容で実施している。授業では、英語コミュニケーション能力向上のほか、英語でのプレゼンテーションやスピーチを行うという国内同様のカリキュラムを、現地提携校講師の指導のもと行っている。

現地での履修スケジュールイメージ（イギリスの場合）

第1週	本学授業科目①	第9週	提携校による英語授業④
第2週	本学授業科目②	第10週	本学授業科目⑤
第3週	提携校による英語授業①	第11週	本学授業科目⑥
第4週	提携校による英語授業②	第12週	本学授業科目⑦
第5週	本学授業科目③	第13週	課題対応
第6週	本学授業科目④	第14週	提携校による英語授業⑤
第7週	提携校による英語授業③	第15週	課題対応
第8週	ブレイク・ウィーク オプションツアー（欧州観光・視察等）	第16週	帰国

現地での1週間のスケジュール例（本学授業科目実施時）

	9:00~10:30	10:40~12:10	12:10~13:00	13:00~14:30	14:30~16:00
DAY 1	授業	授業	昼食	授業	復習・予習
DAY 2	授業	授業	昼食	授業	復習・予習
DAY 3	フィールドワーク				
DAY 4	授業	授業	昼食	授業	復習・予習
DAY 5	授業	授業	昼食	授業	復習・予習

現地での1週間のスケジュール例（提携校英語授業実施時）

	9:00~10:30	10:40~12:10	12:10~13:00	13:00~
DAY 1	英語授業	英語授業	昼食	各自でフィールドワーク
DAY 2	英語授業	英語授業	昼食	各自でフィールドワーク
DAY 3	自由行動			
DAY 4	英語授業	英語授業	昼食	各自でフィールドワーク
DAY 5	英語授業	英語授業	昼食	各自でフィールドワーク

留学中の生活（英語で生活する）

①ホームステイによる滞在

留学中はできる限り多くの時間、生の英語に触れてもらうこと、現地在住人と生活を共に過ごすことにより英米の風習やマナーを吸収してもらうこと、参加者の日々の安全確認等を考慮し、滞在期間全てを通してホームステイによる滞在としている。



②ホストファミリーの選定

滞在するファミリーは原則として1家庭1国籍とし、日本人のいない家庭となる。ホストファミリーの選定にあたっては現地提携校および本学独自の基準を設け、その基準をパスしかつ、留学生の受入を積極的に行っている信頼できるファミリーとした。

ハイブリッド留学展開地 ～ 学生が住みたいと思う街へ ～

ハイブリッド留学の成功には、実は上述の2大要素の他に、留学先の選定が最も重要な要素である。学生は『行ってみたい、住んでみたい』と思う街でなければ最初の一步は踏み出さない。

- 建築・デザイン・まちづくり ⇒ 世界遺産の街 ➡ 【英国・カンタベリー】
- 工学・情報 ⇒ 製造・IT・製菓業の街 ➡ 【米国・シアトル】

<イギリス滞在地／カンタベリー市>

世界遺産が点在する街 ～街そのものが教材～

「カンタベリー大聖堂」のほか、「聖オーガスティン修道院」と「聖マーティン教会」も世界遺産に登録されており、その他に、12世紀～19世紀の建築が東西、徒歩40分程度の市内に現存し、多くの観光客が訪れている。

自然の景観美を追求したイングリッシュガーデンが、人々の憩いの場になっている。緑豊かなケント州には、多くの素晴らしい庭園が存在する。



<アメリカ滞在地／シアトル市> IT、航空、物流、製菓の街



プログラム費用

(イギリスの場合)

留学費用 (2015 年度実績)

ホームステイ費用 (4カ月分/手配費用£50含む)	£2,050
交通費、昼食代 (4カ月分。£300/月を目安として)	£1,200
教材費等 (現地におけるテキスト代等の教材費、 フィールドワーク時の交通費等)	若干 (£300~400)

渡航費用 (2015 年度実績)

航空運賃 (ロンドン往復。燃油、空港税を含む。)	¥215,000
海外旅行者傷害保険 (4カ月分/補償額により異なる。)	¥68,000~

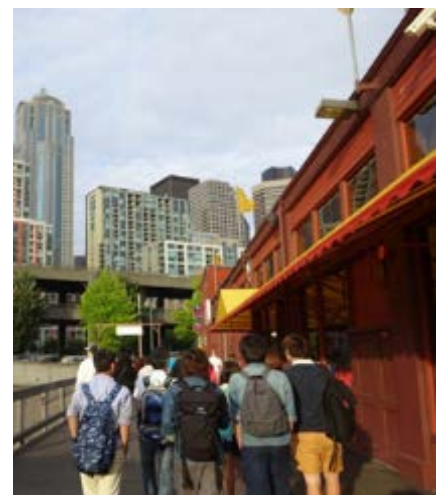
(アメリカの場合)

留学費用 (2015 年度実績)

ホームステイ費用 (10週分/手配費用含む)	\$2,100
交通費、昼食代 (10週分。\$300/月を目安として)	\$750
教材費等 (現地におけるテキスト代等の教材費、 フィールドワーク時の交通費等)	若干

渡航費用 (2015 年度実績)

航空運賃 (シアトル往復。燃油、空港税を含む。)	¥180,000
海外旅行者傷害保険 (10週分/補償額により異なる。)	¥50,000~

シアトル市内での
フィールドワーク**現地受入体制**

本学では参加者に対し、十分なガイダンス、オリエンテーションを行い、参加者のハイブリッド留学に対する認識を深め、さらに現地において提携校はもちろん、本学と業務提携した現地在住日本人コーディネーターも、生活に関する相談や怪我、病気等に対して24時間体制で支援を行う。

また、学生滞在期間中には本学職員を現地へ派遣し(1回2週間程度を予定)、参加者の状況確認を行う。職員もホームステイによる滞在を行うことで、SDも兼ねている。

ロンドン市内での
フィールドワーク

緊急時の対応

留学期間中参加者に緊急の事態が発生した場合は、本学緊急対策マニュアルに従った迅速かつ確実な対応を行う。グローバル戦略部担当者は、学生滞在期間中は24時間体制を敷き、緊急連絡を受けてから規定時間以内に現地に到着できる体制を整え、現地での迅速かつ適切な対応に全力を尽くす。



地方都市（ドーバー）でのフィールドワーク

ハイブリッド留学に関する賛否両論

否の部分として、次のような声があるかもしれない。「わざわざ海外まで出かけて行って、なぜ日本語で授業するのか」、「日本人同士で固まって行動してしまう」、「苦労して勉強してこそ留学の意味がある」、「英語もできないのに海外に出る？それは留学ではない」。

しかし、本学は理・工・建・情の大学である。学生は、すでにセカンドランゲージは身に付けている。彼らにとってのセカンドランゲージは、数式、化学式、設計図、C言語、つまり工学である。これこそまさに夢のグローバルランゲージ、世界共通言語ではないだろうか。

大先輩達の留学をよく考えてみていただきたい。過去の有名な画家や音楽家も、修行としてフランス、ドイツ、オーストリア等に留学したが、彼らはフランス語、ドイツ語ができたのだろうか。彼らのセカンドランゲージは芸術ではなかったか。それと全く同じ発想によっているのである。



提携校での英語授業の様子



本学授業の様子

そもそも・・・グローバルな人材って？ どんな人材？

人は苦勞や困難を乗り越えて成長するものであり、国内においても様々な苦勞や困難はある。しかしもう一歩進んで、海を渡り、海外の「現場」で、「数多く」の、「様々」な経験を積んでいけばどうだろうか。様々な「国際的な場数」を踏むことにより、国内外を問わず、どのような状況であろうと自分で判断し、解決策を見出し、そして解決していく力をつけていくのである。

工学院大学の考える

グローバルな人材とは



英語力がある X
留学歴がある X



いかなる場面でも対応できる
柔軟な発想と行動力を持つ

ハイブリッド留学から得られる成果

本学の考える真のグローバル人材育成とは、留学参加のハードルを下げることで、学生達に、まず海を渡らせ、海外の「現場」で、「数多く」の「様々」な経験を積ませていき、様々な「国際的な現場での場数」を踏むことにより、国内外を問わずどのような状況であろうと自分で判断し、解決策を見出し、そして解決していく力を育成していくことである。

エンジニア、サイエンティスト、アーキテクトとして必要な海外での経験値を上げながら、英語やグローバルな思考、解決力（行動力）が自然と身につくよう本取組を開発した。



シアトル市内でのフィールドワーク

「トビタテ！留学 JAPAN」構想実現に向けて

2013年11月14日開催の文部科学省中央教育審議会において行った、大学生の海外留学12万人達成へのKEYとしての本学の提言は、次の通りである。

文部科学省は、大志あるすべての日本の若者が、海外留学をはじめとして新しいチャレンジに自ら一步を踏み出す気運を醸成することを目的として、留学促進キャンペーン「トビタテ！留学 JAPAN」を開始した。その主な骨子は、ターゲットイヤーである2020年までに、大学生の海外留学12万人（現状6万人）を目指すというものである。

語学と費用の壁に阻まれ、減少の一途をたどる留学者数を、あと7年で反転させた上に倍増させるためには本学の方式が最も有効と考える。まさに文部科学省の考える「大志あるすべての日本の若者が、海外留学をはじめとして新しいチャレンジに自ら一步を踏み出す気運」を作ることが最も重要であり、「まず語学の修得から」という100年以上も前から延々と続く「型にはまった」スタイルから脱却し、「まず海を渡らせる」という工学院型に変換しなければならない時期は、「今」ではないだろうか。

大学が本腰を入れて学生の留学をその裾野を広げて促進させるためには、まず舞台（学生が暮らしてみたいと思う街）を用意し、次にハードル（言葉と費用）を劇的に下げることにより実現できるものと確信する。語学は必ず後からついてくるものである。

若者にまず海を渡らせ、グローバルな感性、感覚、視点を吸収させてから、次の段階（ジョイント、ダブルディグリーなど）の留学制度を考えなければならない時期だと考える。

